新訓禁

久之部

八

津田文庫
文庫1
1604
9

早稲田大学図書館蔵書

倭訓栞前編八

久の部

洞津　谷川士清　纂

く　本をよむいとまなく通をもよむいくにの略也○こん反くも也そ
古今集詞書かも今まうでこんと今まうでくといふ○物語抄
人くぐしてなといふ供字也

△くあ

△くい　悔也日本紀万葉集よんゆやいゆえまそきこりけり又く
いれハ千度ゆとりくいるも暗いる反ゆえ祝詞ゆ悔びるもえゆくる
と云へかゝれ○えさをぬくいてくあるハ後悔とりたゞれ謂なり
後悔也字待也召南よんゆ

△くう

△くえぶ　潰也ありえぶ反ゆえそ万葉集よくゆとあり

△くと　淫馬楽よんゆ梁塵抄よくゆもいふ彼淫谷淫也

つだ文庫

010190596244

△くが 陸をいふ日本紀にくぬがともあり地形をくにがといふ意なるべし
くがべ 古事記に玖訶瓮と見えて日本紀に探湯瓮と見えたり
くがだち 日本紀に探湯または盟神探湯とも見え或は湿泥納釜煮沸攘手探湯泥或焼斧火色置于掌ともみゆ今の御湯也此言本なる也真臘風土記に以鍋煎油待沸探之といふに同じ
△くき 日本紀に洞字岫字をよみ新撰字鏡に嶂巒山をもよめり洞は岩穴なりて気を通ずるをいひ岫は岩穴なりて袖に似たるをいふ也又漏をもよめり古事記に自我手俣久岐斯子也と見ゆ義相通ふ成べしくぐりの義なるべし長明の東紀行にくきが滝といふなる荒磯のさまを見えたり○茎をよめるはくみの義くみ及ぶ枝葉を含める意也○倭名鈔に豉をもよめり新撰字鏡同じ或説に今の醤油といへるは古へにきこえ泉州堺本や字集等にも此字すくきは漏の義たまりといふごとく今の醤油なるべしといへり○くきづけは韲也茎漬の義なるべしすいぐきは京外の賀茂より出る酸味を賞す○久岐り

崎は駿河にありもと清見が崎といふ所也といへり洞海は長門にあり
△くく 日本紀倭名抄に菊をよめり音の轉也○万葉集に登妣久久鶯とよめるも莖くぐる義也
くぐる 日本紀に泳字萬葉集に潜字をよめりさればは水をくぐりて輪をくぐる垣をくぐる等といふも漏をくぐるとよむ意也○潜湖は伊勢二見郷にあり
くくむ 日本紀に街をよめり含むに同じ○馬銜を俗にくくみといふるし倭名抄に見えたり○絆をくくむは帖也といへり
くぐつ 袖中抄に裏字をよめり莎草を編て袋にしたるといへり万葉集抄に細き縄を持て物入るる物にして田舎の者の持たるといへり○倭名抄に傀儡子をよめり今音をもそへてくぐつともくぐつはともいへり俗にでくるぼうといふ是也裏を負ありきて戯曲をするとそてふ成べし事物紀原に漢高平城の圍陳平の計る起るといへり○歌の集に遊女の類を傀儡と去せるは舞妓の類をいふ朝野

群載ニ傀儡子記ニ云テ男則皆使弓馬以狩獵為事或跡双劔
弄七丸或舞木人鬪挑云々変砂石為金錢化草木為鳥獸女
則為愁眉啼粧折腰步蹋歯咲施朱傅粉倡歌淫樂云々
又奇ニ小倉山ニ云ル里大井川ニ流レ苔屋小野ニ流レ篠原ニ移ル里
なしこうみなくふせり人形をつくれとくんずといふ埃嚢抄ニハ
男を殺せを業とし女を偏ニ妙ニ如ニ云々と云リ今俗ニ白河様
足柄竹下催馬樂里島子歌袖掉歌辻欲等ハ當時ニ流行物なりとそ
云々 神代紀ニ溟渤をあり哉なるなむ云々 ○云々を
ふくめる 幼少ニ児ニ食をあてゝ云リ哺字ニ含めると也 ○日
本紀ニ過飯をいひくめと云々 源氏ニ御飯をくめたまひと云々 增鏡
ニ関白殿ありたまひてくめ参りたまふと云々 枕草紙ニ言くめ参
らせ給ふ云々

日本紀ニ括緒禪と云々 後世指貫ニ始ル

なる屋しと云リ

△くけぢ 埃嚢抄ニ匿路をありくけハ岫と云也リ ○出雲ニ
ハくけ戸と云事ハ今潛戸と書リ
くけ帛 常細ニ或ハ紬ニ匿ハ縫ハ事ニハくけぢと云也リ
うるか物語ニくけぞうと云ル職人奇合リ
人妻ニくけしと云ル也常ニくけぢもあるハ誤カ
△ぐご 海人藻芥ニ四裡仙洞ニハ海を供御とめぐると云て毎日三
度ニ供御ハ御めぐり七種御汁二種也御飯ハ五穀ハ強飯を用ル
也と云ゆ貢祝詞要ニ供御湯藥飲食舟船と云リ ○供御ハ
を江ニ栗ニ鮑黒津村ニ云ル歌承津村ニ至るまそ江津を云リ
くらん 因書ニ酒を九献と云ハ也光源院御記酒を沙代ニ云リ
此事なり凡て祝ニ酒を必を三献也と云々左傳ニ饗禮九献
云ル也なる酒なるへし
△くさ 草を云ル事ニて拾遺ニ拾遺ハ云ル也 ○式陸奥國苔

野の神社なり説文に茵は草也と見ゆ弘安中蒙古の賊を纔りし草野七郎なり○草ハ青きものなるに詩詞に白草といへるハ胡地の草をこそ白しといへり○種をいふも草より出たるなぐさみ種なりつひ種かこち種わらひ種なといへる是也全浙兵制に載たる所なり

今乾煙の取り霧かし用ひしをたくらふるの洞なりけり

○たきおり義くさといふも種成へし源氏に見ゆ○胎毒をくさといふも臭き義なるへし

くさか　古事記に日下をくさかとよみ序に断あり日本紀に草香と見えあり日下とよむハ草液をくさかの義にや倭名鈔の名に日下をくさかべ日部をくさかべとよめりこハ日下部を略せしにや

くさし　臭をよめり腐より出たる詞なるにや

くさり　腐をよめり朽去の義なるへし○鎖もくさりといへり物河百そに神代紀のあやひもくさりなとよめる是なり鬘にかゝるをいくつもくさりて用るなり

くさび　楔をよめり職人哥合にも見えたり車にいふは轄なり和名抄にみゆ
○草火をもえ川草火ありといへるハ艾草の萌出る氣煙を擬へたるなり○魚にいふハ長さ六寸に過ず大和本草に圖あり

くさぐ　日本紀に品字雑字又種々をよめり種類多き意なり増韻に種々猶物々といへるも見ゆ又八色をやくさとよめるも人をくさくの品をよめり

くさぐひ　源氏に見えたり日本紀に種々雑物をくさ〴〵のものとよめり

くさばゝ　神代紀に東草をよめり延喜式にはつゞらと見えたり青草葉の義なり

くさじし　草鹿の義躰草の鹿を象たるの名なり習ふ的物をするに光の稽古なる事を得べく草をもて鹿を造り或ハ張脱なるもありするとハ小なるより建久三年に始まりし事東鑑に見ゆといへり杜氏通典に馬射の式をいひしにも綴皮為両鹿馳馬射之とみえたり文盛裏紀に始まりの上市の事に五六歳斗も成る童の射たりし行の小わらハ

さてさ紀に矢的を草鹿とゝなして左に風を祈り給ふ北咲祢
社夏六月十五日之最を草鹿之起庶民之中長弓馬者自國守命之
令行此禮曰草印地とゝなしさてり　腰甲をいふ日本紀に押をうゝろひとゝあり考に笘摺と
手り馬に草脇といふるゝさまや甲の袖くさすりとゝいへハ商の万葉
草摺とハいふる也　源世を制もかゝりて或ハ草摺とも芝摺ハ草摺に
作る源世に名なるへし　書費誓に善敷乃甲冑とゝて注に敷ハ縫完也
とあり前漢書に衣三屬之甲注に屬ハ甲札之数とゝてさり史正義にハ
首身裳とゝゆ
さてあをも　倭名抄に闘草をさあり万葉に草を闘しめて戯と
すれ今廣葉にゝさり
さてはいと　草に象れる草葉をいふ白樂天の詩に草縷葉
茸雨剪齊とゝゆ
さてむすび　結び草創に云てさりて婚姻に約をなすを事とも

いふ結髪に云てり左傳に魏顆の父に妾を嫁せし事に老人結
草とあるし事とするハ牽強なるへし　草に席を結ふをいふを唐高僧傳
に頭陀為業結草為菴とゝなさり　○喜撰に云草に結ひをりて
草を結んて乃に織とするをもいふ　○源氏物語に草を
人に結ひをゝん新千載集に相知りて女に家乃草を結ふとゝ
草をむすひて道行とゝあり
いとゝ門出をして草むすひとゝ風吹とゝあるをん日まてさり
さてはかゝて　拾遺集に草に結かゝるもことやゝてさけとゝあり中臣
祓に細ゝ形に切り草或ハかゝとゝあり神代紀に草葉をもみ延を結武り
草乃片葉又垣葉とゝて朝野群載に破葉とも云り虧る葉
さてひとがゝ　日本紀に蒭靈をゝあり草人形ゝて今いふ藁人形なり
鉄人形金人形等ゝ式にゝて云り土偶人木偶人ハ史記にゝて云り
さてはみなゝ　万葉集に皆字をゝゝゝあり集ハ皆なるへし
やゝなりかゝとゝいへるハ結ゝて定家にもゝあり歌に結ひ

この茅ともいへり儀式帳に悉皆の二字古点にかやとよめり
くさなぎのつるぎ　神代紀に草薙剱と見えたり名義ハ景行紀に見えて
あり○草薙の祠ハ駿府に在を亦く草薙村草薙川もありとぞ○伊
勢外宮の摂社に草名伎社あり垂仁天皇の御宇織出の朝敵阿彦
退討の時大若子命に下し賜ハりし標剱仗をまつれりといへり
△くし　奇字をよめり霊と同し○髪又首をよむも奇の義なるへし綱
なりみくしといひくしけつるなといふ是也○櫛ハ髪に用る物ゆゑなり
名とす奇に通ずるの櫛栢の小櫛箭の紫櫛剃櫛なとよめり又字によるなり
櫛ハ紀に櫛から櫛もて櫛とらし事とえたり類聚雑要に解櫛延喜
式に梳櫛櫛あり○新撰字鏡に鈿をよめるも櫛と同義なるへし梳を
かくし歯篦ハもろ歯なりともいふ歯の称和漢同し唐制に櫛ハ
たり○くしの歯をひくといふ語ハ櫛比なといふかことく見えたり
○籤ハ櫛よりいへる名なるへし倭名抄に籤ハさけのくしとよめり○
神代紀に櫛をよめるハ集韻に櫛俗省作栫と見えて上れを串と同く用

よめり又日向国に韓櫛生村あり俗栗を謂て區児とし韓栗林のあるも
さし風土記に見えたり○萬葉集に屎遠くまれ櫛造る刀自とよめるも
籤の義也今も岐岨の山中に用ゆるかいやのくしをいへり輟耕録に今
寺觀削木為籌置溷圊中名曰廁籌と見えたり齊文帝如廁令楊愔
執廁籌ともいひ魏胡大后常為僧造廁籌必自試諸類といふか如き天
子国母の事なりとても古くかくのかし甲乙剰言にハ安平ノ俗如廁男女用
瓦礫代紙殊為嘔噦といふに至れり○孔子を直くハくしとよめるハ文
くし孔雀のよみも同し續日本紀に勅号文宣王とみえて弘仁格にも
應改孔宣父為中文宣王とみえてかれハ西土の謚号をいふなれとも用ぬさた
ら新くハ釋奠の礼なれは釈奠をくし祭といふ○孔子の名のもとを
もとそれたらしけむ皆の山人といふ事盤翁大原紀行にみえて是皆の
山人ハ惺窩先生をいふ○源経に驛の長にくしこらすといふ菅公の
故事也河海に驛長莫驚時変改一栄一落是春秋とみえたり菅家
文草に此詩在或僧侶書中不知真偽といへり大鏡にくらし須磨の記

みも詩のてにをはつゝまりて和詩と云り此等は歌
なり一説は句詩也全篇なるぬをいふ也とも○源氏物語屈折
事ゆゑ也○串崎は長門也義経は平氏を檀浦に破り給ひし舟を崎
くしひ　神代紀に霊ありと奇日代の霊と地間は奇霊日ましく
て豪邦は日をあやしくなるを紀かくふひひるをり
くしろ　倭名抄農耕具に釧とあり字書に折木為器又裂也
とあり○くしろさくしろ　万葉に櫛代なるくしろ
図書に名は釧代をも釧せり言葉は釧とくしろあり玉釧とい
へるは手玉拆釧といふは俗なるへし倭名抄に腕環をも釧し
て万葉集は釧著手節乃崎とつくるも腕環也とへし
印本は釧を釵とかくは誤也とおもふ正韻は串音釧物相貫也とあ
るは腕環也とあかるは串と同しく訓なるへしくしろは脇環
万葉集にあり
くしろもこゝにくしろまきまくもあれは吾妻はよまきてあるをくしろ

神風抄は伊賀伊賀郡喰代御厨是ゆくしろとあり
くしど　中臣祓は屎戸と書りそゝとあり神代紀は放矢とも
送糞とも見て古語拾遺は以屎塗戸とも出せり古事紀に於
聞看大嘗殿屎麻理散といふ○釋日本紀は凡欲詛人之時必有送
糞其坐若涙其糞者必有憂病是古之遺也今代人之欲詛人者
亦有放矢者倣此耳とあり源氏抄は村上帝の時宣耀殿の女御
と藤壺の中宮と沙汰ありしかは方々の人々かそれを
ましなしとて埃嚢抄は軽羅は屎を遍身に塗て糞
を放つの律なりとも見て其糞穢は洗浄めてを拭をたゝくとも
法也人の近つかぬ為也といふこゝは竺土の法なりとも
くしげ　扶字をあり日本紀は串とも櫛とも櫛へし新撰
字鏡は剣をくしげとあり○倭語乃志とあるとも為扶
乃美なるやゝ
くしげ　倭名抄に觸とあり觸を体なるへし新撰字鏡は

釧をもあり

くしざし　神代紀に抽籤とゝみ延喜式に串刺と書り人代に田を奪ひ己が田札を立て相争をいふなり是古語拾遺に竊往其田刺串相争とゝ書たるを神代紀に秘則と書せり○皇代紀に梟をよ絶り梟首をいふと説文に夏至捕梟磔之以頭挂木上今謂挂首為梟とゝ書たり○俗に梟首を獄門といふ其場を称せるを技葉略記に梟浮囚安陪貞任藤并経清等傳首京師繫於西獄門とゝ書たり

くしぢかた　古事記の奇甚とゝ書たるを奇日奇魂に例なり必彦名命をやせり

くしぢたふき　源氏に戀の山はくしぢたふきを山の抄に引たる仆也俗に彷のつまつきといふに同しとゝ書

△くしぶ・吉野弘國栖は神武天皇に時來獻して仮を奏せしより法に節會に國栖奏として世く絶を延喜

式に献御贄奏歌笛毎節以十七人為定とゝ書て北山抄に國栖奏古風五成兼平記云其笛似以指摩孔とゝ書園大暦に永仁四年正月七日罷國栖坊家奏とゝ書て江次第に一献國栖奏二献仰御酒勅使三献内教坊別當奏舞妓奏とゝ書たり

くすり　藥を初の草とゝ書たるを仲に似たるに同しとゝ書たるを内に草也多しとゝ書て藥録をも本草といひ俗に引たり○延喜式に弘仁貢及倭名抄に載せし藥品をも今悉く詳にとゝ書て天文中に吉田宗桂明に入て名を得たり明人意庵と称せるを和藥を識別し性味を辨明せるとゝ書たる○藥剤師に藥醫門といふとゝ書たり左右に二柱を立て廉を一醫家に門造ありとゝ書て○内裏式に十二月晦日中務省申久内藥司乃供奉礼留元日乃御藥又臘御藥進良久乎申給久止申次宮内省申久典藥寮乃仕奉礼留人給自散又殖藥様進良久乎申給久止申とゝ書たり○藥殿に御銚子に破損しとゝ書を雅忠典藥頭なりし時新しき銚を古とゝ書を雑へうちかへして供御にとゝ書たり○

全術兵制ハ藥丸をまろがしたり藥包をつつみたりなどと藥
刀をつかひたりなどと藥碓をつきたりなどと譯せり○良藥口ハ苦うして
病ハ利ありハ說苑ハ孔子ハ○こがたるハ獄ハ蝦夷ありなんのありハ
て金ハありり○景岳全書ハ葯字と通じたり
くすし　和名抄ハ醫をあり藥師の家なり佛足石ハ所ハくすし
とみえたり唐訓ハ醫骨ハ孔ゆ○姓ハ藥師なり續日本紀ハ内
藥司佑難波藥師奈良といふなり其祖德來ハ高麗国乃人なれば敕
ハ授化を德事ハ世孫惠日唐ハ入醫術を學ひ得て藥師ハ姓を
賜りぬ惠日ハ舒明紀ハ孔ゆ又文德実録ハ左常陸国大洗磯前
酒列磯前両神号藥師菩薩名神とあり桓武帝ハ第ハ菩薩ハ稱
所ハ神社ハ号なり胡ハ混せるも久し○兼暦四年ハ高麗国ハ
我邦ハ醫を求めしハ遣ハさす其牒載て朝野群載ありり雙魚猶
難達鳳池之月扁鵲何入鷄林之雲といふ名句ハ匡房ハ文也なり丹
波雅忠を日本扁鵲といふ○琉球蝦夷ともハ醫藥なりしなり○祝詞

ハ奇ハ字をあり稚拙紀ハくすしをあり拙
系譜ハくすしをあり拙ハ源氏ハくすしかんんを見し
くすしさ　姓ハ楠をあり正成弟正氏正季子正行正時ハ忠義ハ
ありしハ世りあるあり事弟左馬頭正儀飯盛城を攻落されし
將細川頼之ハ和泉以下ハ管領を拜りあり
さすしさ涵く申送りしハ正儀答へて父ハ王を勸めて忠ハ君
聖運を開きハ時しハ君ハ為ハ君をへきなりそこそへさすり
乃細川勝元ハ人をあまかりて方代乃恥を求めハ孔ハ恥をあれ
ハ金鉄ハ志をいはしけりさ水ハ南朝長慶院の將ハ正儀終り
頼之ハ言ハ從ひハ軍家ハ帰服せる事年數通經ハ南帝ハ合体
ありしハ坂無山院ハ附うしてあり大日本史ハ正儀叛降足利
義滿ハ出し楠氏族ハ正儀ハ攻和田氏族起兵討正儀事ハ孔ゆ惜
を絶ハ名せるも又何ハ面目ありて泉下ハ父兄ハ見えんや遺憾ハ堪
くだまし　長命縷といふ風俗通ハ孔ゆ延喜式ハ藥玉とあり五日

此後或は[illegible]し三代実録陽成天皇元七年より始て[illegible]御紀より糸所
供奉薬を撤去年九月菜萸以薬玉差替御相前例[illegible]糸
[illegible]を造[illegible]て清涼納[illegible]縫殿[illegible]
[illegible]みさげて[illegible]せ[illegible]る道長公の記[illegible]絲所薬玉持参[illegible]
薬[illegible]を[illegible]る絲[illegible]て薬[illegible]と[illegible]○[illegible]
宮[illegible]此[illegible]神[illegible]
草[illegible]御帳[illegible]長[illegible]菊[illegible]菖蒲
[illegible]菊[illegible]枇杷皇太后宮[illegible]
御帳[illegible]菖蒲薬玉[illegible]
[illegible]辨[illegible]
乃[illegible]

元日[illegible]屠蘇酒[illegible]先嘗て供御[illegible]童女[illegible]延喜
式[illegible]薬子勘文[illegible]陰陽寮[illegible]進[illegible]雲圖抄
[illegible]薬子總角例童子装束[illegible]

今[illegible]公事根源[illegible]御薬[illegible]式弘仁中[illegible]既[illegible]天
武紀[illegible]○藤原薬子[illegible]平城天皇[illegible]尚侍贈太政大臣種継之女[illegible]
[illegible]推古紀[illegible]五月五日薬猟於兎田野[illegible]
[illegible]鹿茸[illegible]百薬[illegible]採[illegible]天台訪隠録[illegible]以端午日
入天台山採薬[illegible]
神宮[illegible]供奉[illegible]儀式帳[illegible]四民月令[illegible]菖蒲酒[illegible]
[illegible]

菖蒲刈君[illegible]沼[illegible]
[illegible]雑[illegible]遣[illegible]
[illegible]

△くせ　癖疾[illegible]毛病[illegible]字書[illegible]癖[illegible]嗜好之病[illegible]晉書
[illegible]王濟有馬癖和嶠有錢癖杜預有左傳癖又王福時譽兒癖黄魯
直香癖李渉竹癖[illegible]或[illegible]事[illegible]

○諺に人に一癖といふ意紙和漢に奇り
人をに一つにくせはるをとゆゑに安潟氏
奇るみにくせも面白に注解は緑行屋きてうそ如そうみ一和泉式部
ものにくそうみをにの附をかれをふとろはし入てうみ為道綱
北母は歳を背きて目をさぐて寄一条とそ山谷の詩に閉門覓句陳
無己對客揮毫秦少游と今語也多紫葉に言痛といふに似たり
こぜち　伊勢物語に人あるを義解に謂多言也といふ誤恩
戸令に弃妻七出に條に口舌とあるを義解に謂多言也といふ誤恩
徑に舌者鑿身之斧也と北齊書に當有口舌事とあり
くせん　五位以上に官位を授らるに頭辨を召て勅命をうけ辨に宣を
調て上卿に達を楊文公談苑に宣勞賜曰宣とあり○こせん
ひんに口宣案也頭辨より上卿へ達せし口宣を其家に納て別に書
写して大外記に遣はすをいふなり
〈くそ　糞をいふ臭き也人を罵れ詈ものいふ○俗屎とかいてゆげを

いふ宗神紀に其卒怖走屎漏于褌乃脱甲而逃とあり○字彙に
惡糞穢也越王勾踐為呉王嘗惡とあり○兎糞を明月砂といひ野鴿
に矢を花盤龍といひ鸕鷀に多を蜀水花といひ雀に糞を白丁香と
いひ蝙蝠の糞を夜明砂といひ寒号虫に糞を五霊脂といひ蟾蜍の
糞を土槟榔といひ蚯蚓に屎を六一泥といひ皆三字に呼なるいかなる
あるや六經に緯もまた三字なるそなやしきを又猪零鴨通蟻泥蠶
沙鷹條牛洞羊点等に名もあるなり○京集俳諧に糞に似たるよくそなる
ものに添ものを女屎といふ添ものに源氏物語にいづくにそなたに琴をてまもる
又服守に屎をいづまに紅といふもうかに物語に京にそなたに左和物語
りこにくしくくそをいひをるに人とかくかくそに童子に屎を稀と
ふとなり源氏の物に貫之に童名内裏に阿古屋とあり
くそまた　神代紀に大便又送糞とあり萬葉集に屎をく麻礼
とかくなり○よく食して大便せざる穀瘕といふ邪邦に不大便
三年食如常といふ病なりさ

くそふく　蜻蛉日記に清くそふくとあり

よく人作り

△くだ　管なり　枕に管窺天とあり　鑰匙なり

機密なくだ等也　新撰字鏡に籠也

くだく　神代紀に推破とあり　竹管とくだくハ玉篇に

つぶすなり　和名抄に管より出るを細かへし　西土にても破作れ塊をなす

くだり　一くだり二くだり　和名抄に行也　ちなみし字一行をいふ　日本

紀に章もあり　枕草紙に　ものみなとくだりせばやとあり　又裝束

り幾くだりとあるハ領字也　一對をいふ

くだる　下流をいふ　くだりくるを泝と自他ハ是なり

くるまと　万葉集に今腐と書　くるまとかりひくことをいふ　奇

くるあり　日本紀に被髪をみくしとあり　霊異記に粉とあり

くだち　古今集に　くだちのとあり　齢なり　也　万葉集に歳くだち

といふ　歳なり　とあり　顕昭ハ鉄字をもくだち　万葉集に八隅字を

半りとあり

くたら　日本紀に百濟をいふ　舊多羅ハ韓國ハ地名也

くだもの　菓をいふ　木種物ハ総也　木種ハ日本紀に見えたり　倭名鈔に

蔬菓をくだものとあり　○今ハ俗菓子ハ音を用ひて饂飩餅ハ倭名鈔に

朝野群載に　又贄ハ菓子ハ唐例に　市肆記に果子部にて餅饂飩

とあり　又交菓子ハ稚名　○　菓子ハ稚名

くだかけ　東国の家をくだかけといふ　一説に鶏を梵

り矩吒鬼設羅といふを略して　梵倭兼称也　一説に百濟雞ハ

一説に百濟雞ハ　室町家ハ将軍の　唐九字　或ハ声を賞して菅掛とも

くだぬき　先端を下すと　手ハ何也　ハ地を行也　充行を記し　御神判を

くたハ四馬と日本記に府太とあり

ゑて殺つるなり○神風抄に建暦二年所被下院廳御下文也とも云へり朝野群載に政所御下文とも云ゆ

くぐひ　倭名抄に小角を訓せり管也笛といふ形如竹筒といふなり日本紀にくぐひ云々あり新撰字鏡に簫とも同し正韻に竹簫とも云へり

△くら　口ハくらし也たしなみ及ち也食物を醫熟とも云へり名くとも云へり○傳子口銘に禍從口出病從口入とも云ゆ○倭名抄に鯢とあり今いふ石龍子なり○鷹と韓語にくちといふ日本紀に鷹倭名抄に俱知西字急讀屈と也り百濟に鳩鶻といふ見なり草鷹也一名鶏鳩とも云へり後撰に奇なるもあり今は朝鮮語にはまたといふなり

くちを　朽葉也紫なる朽葉也赤朽葉也赤朽葉あり拾遺集に黄色也又もとゝうの字也集り

紀に意乃なるそれいろはにほへとちりぬるを樂しき

論語に朽木とも云ゆ或ハ梓とも云へり○朽木は松とも云ハ別に所なり新古今集に云へり○朽木形の杭下ハ建暦陸紀に見て朽木形れ疊ハ樗祕抄に云へり○日本紀に梅とも云へり故に同し味に類くくちめ　神代紀に口女即鰡魚也とも云へり口疾なりとも云へり名くするなり○枕草紙に名めかしさに作りとも云へり拾芥抄樂器部に朽目とも云ゆ和琴に名也とも云へり結婚月紀に

ひさしもるをとしくちなりとお語に関はくちゐ井紀に見て

くちぶし　朽惜に見なるへし口惜と書ハ同し

くちびる　唇とも口緣に見なり新撰字鏡に口に緣とも云へり下唇ハ地閣なり○孝治抄に口びるとかへしてゆくまぬるにそなりけりと云ゆ西土にも反唇と書り○俗に唇陵とも云へり地獄ハ霊樞に唇薄輕言とも云へり

くちがき　招草とも云ふ口書に見し

くちこく　口利と書り榮花抄に少とも云へり云づかへしなれ

たらちめ　論語に利口佞字は論語にみゆ

くちうる　巫女の祝して西土に技鸞といふ是なり後漢書に台記に寄帝巫口とあり亡者の魂を招

くちをしい　口惜しの略なり口惜しは論衡にも見えて彼巫女懷中にする後

きこりとかくてそこなふと述べ事と論衡にも見えて彼巫女懷中にする後

佛にいふ若は異相の人乃ち口をかうべとして造るといふ所謂縣巫の所業也

くちをふ　加茂保憲女集元日の事にあゆみ口をふくみとあり古俗

日記にあゆの口をふくみ天竺の頻婆沙羅王の太子提婆が

嬰兒を化成して抱て口を吸ふ事を史記に嘗吮遊僰

り得口子をとあり　鯛をとあり口に貫て乾て彩撥字法にもとひをとる

くちをふ　餌を寄食也と注せり

くちさがら　優名抄に吻又喙をとあり口裂に象へし文にも見えたり

源氏に辯舌をゆとけおさきとあるも是も彩撥字法に咽をくちさ

とあり口端に象へし吻也とみゆ○口語に口さがなき者とあり

笑雀にうそ鳥に吻をくちばしとあり

くつ　履又鞜又舄をとあり靴に鼻切沓深沓浅沓なとあり唐韻

に草曰屨麻曰履革曰履とあり延喜式に凡公事公會に所著の人悉く

靴を着又公會の時にすべて笏を持る人は雨泥に日靴を着くつ○唐

令に舄重皮底履單皮底とあり令義解に舄者高鼻履と云て漢語抄に

突子鼻高履也とあり○新撰字鏡に鞮をくつに比とあり○軍

家に岩沓といふは歩行に造る嶮岨をふむ故なり○履彩にくつも

冠とせしといふ説は花を冠雖敵宜加其上履雖新宜居其下とあり

くづをれ　崩をとあり潰墜に見えたり○くづれ川に紙をはり九頭龍川にあり

くづをれ　源氏にたいらげをれをかく半り顏をいふ崩れ折れ成へしとあり

くつろぐ　左傳に点を寛とあり莊子に徐則甘而不固とあり甘字も

くつろぐ緩やかに形をくつろぐ彩六帖に可ものあり浮寝をくつろぐ

詩玲日記に松葉紙をくつろぐとあり○俗に安居をいふ

ちつぐみ　倭名抄に鏢をあり倭よりてことのふるもはてあり口食れば鳥
ちつみハ馬衝れ家と今ちつとのふ見なり新撰字鏡に八鏢をちつ
ちみ鏃をちつとれ鬼とちみ霊異記に纏をあり○延喜式氷室雑用に
條り鋲をちつと列せり氷をちちむとふや
ちつをつち　倭名抄に纏をちみ倭よりちつをいてとはてとり新撰字鏡に
勒又靽をちつあり口輪連れ家へし今ふ手綱也とあり○袍れ織紋
りちつをといふも奇に通せしちつをとり茅形をかちてちる織をちつの
也を論れなをちつあり○娼家よりつまれ名ちつも纏なるへし多
くれ處女をちつめて一廓を出さび馬れ纏ちつめし一説に天正年間
林某なる若侍に柳巷を開きしに円形れ地を十字に割て家造り
をを形状鏢のかしてちつと呼ぶをなとれも出り○老鶴
をいつるハ年寿に純雌無雄與他鳥合とあちり
△ちて　秋字をちあり尾張れ地名に長湫なり兎蹄に大久豆細久豆
あり集韻に北人呼氷池為湫とちあり或ハぬまとちあり穴注手れ家へし

△ちど　倭名抄に窓をちあり竈後穿也と注せり行紀抄に竈をちと
三へり結てちくちど或ハけてとちくちり或ハ行竈をちあり墻字に
韻書にちんちど○式に大和国平群郡久度社名今久土村とあり
ちどく　口説れ義くハちちれ略く口舌口偽ちれ音とちく物語なとに
かちちどくちちんちちり○ちどのちどりなちちり結も同となる歟○口語
り功徳れ音もなり
△くなど　岐神れ名号を来名戸之祖神とあり神代紀にちくちり
書に岐神をちなどれかちもちり古事記れ奇にちちれ事がき
ちちハちちつきハちへゆくちちるハ来経也ちへゆくハ来経行也
ちれハちちくちと同しくちちと同し以を経て来ちとのふちちと戸ハ所
也ちとり○辻祭を岐神と称せし半扶桑畧記にちくちり
△くち　邦國をちあり與をちちみちちあるちちて相與をちち地をちちちや
神代紀に六合をちあり八嶋国とちちも同意也　日本紀方望集あち

郡縣鄉邑をくにのみやつこの名とし
たるなり　國人とかくるあハ後漢藏院れ所諱邦になりしゆゑなり
避てうみしの流例となりし也とこの
たにつもの　日本紀に毛をもあり土毛まこと信物も同し方物も訓へし音
經れ後に方土所生之物とるくるり○くふれをぬハ調れ絹絁也
くるみかと　地祇とのよ万葉集れ紀をくふつみかれらをびてとこる
也近江の日吉社れ山くるりをこり一説にくるハ山を指とこり儀式帳に
也度會之郡國都御神社とくるくるりさかとこハ神名式に度會國御
神社とこるもれまりてくるみハ國産れ義也とも也
たにのつかさ　國司れ家也延ハ音をとをてこり國司ハ守介掾目とわくる
てのつかるををて日本紀に國司守ともあり司ハ官府に就てひと
守ハ其人に就てこるを國司れ称之しく佐りくるハ伊勢乃をを北畠家應
暦元年より天正四年まで二百廿九年うりて古ひくり○国司を國上とも
ひし事霊異記に今出守れくみとこるを又出司をたれみとこりくるり

くにのみやつこ　○日本紀に國造をくるり延世れ國司乃ぬし手出れ宮社を
事とこるをやつこれ名のりとこるひまるを紀を寄き造りくるを家人ハ
くにづことくるみて事足ぬをもいるくるを非くへし日本紀に諸れ仕奉る
人等を惣等るに八必寸ハ連伴造國造と並へいり國造ハ諸国にて
国を治るを以今音をを呼とを紀ざるハ出雲に乃をを紀り紀列国
前備中吉備津宮因列宇都宮ともを同し○孝德れ御宇に国造を
郡司に改れしハ神事に紀るのみりん文武れ時に神事をも兼ねせり
也とりかくて後神事に云をを公事をかくをくりしハ桓武れ御くりに又
國造ハ神事れをて別に郡司ハ置ぬし也とこり
△くぬが　日本紀に陸ををありくふがれ物くるれるよこれし
くぬち　方言集に出津とをありふうを反ぬ也
くぬがれみち　日本紀に北陸ををみ小海乃ををくふがれみちを列り
○北陸宮と称るハ高倉れ子紀中宮称ましをも称る
△こを稱る　古今集序に浅みを人しの一附をこを稱をこをくり小野れ頼風れ

加事をいとのぶかし

秋は野となまめ紀とそる女郎花あれしかすゑ一附

といふる所なるあかしうまし八女は性はらめしきし繰絲は蚕の

屑しをはらりて拾ひとつあつてらの涙は蚕の糞をもこれとす

△くはえかう　源氏ゆゑ薫衣香は物をうしなねえかうもこれとす

△くはい　蚕屑は綿ゆふハ宮は拾きあくこれとす平家物語は蚕は繰

みもくはせといふ○桑ハ蚕は食ふ桑ハ蚕屋と名づけなりとて

こと桑すこハかひこ桑まぐりく白桑也ひめぐりく女桑こ子と椹といふ

くはいちご也桑耳ハくはたけも山桑の名漢も同し麋也といふ新撰字

鏡は梧梗をかりくはとしめくはいとして○鏵ハ音とをて倭俗とせりとい

ふ也とをはくはとして鍬も同し大鏵あるもこれ新撰字鏡は鑊又鏵もあ

る唐ぐわく鏟子也

くはし　日本紀は妙字古事記は微字とをみ考る要字精字をもあり

加とをとをす○貴女をくはしめとをるとくはしきをこれ細字をもあり

ぐはし　合字をもあるとみをもぐをくはしく咋合は爰如へしひはの反をもし

くはす　合字は字也古事紀は合せとをもくはしくをもを目合をもり為合せをる事

をもくはしとをいひ出合せをる事紀出くはすとをいふ彩也

くはつみ　加字をもあるをくはつみをもいりる反ふ也尚も加也と注せり○

ぐはつみ　日本紀は分字又施字をもあるをくはつみをもこれとす

くばる　賦字をもむも分賦乃をもし○新撰字鏡は嚫をもあり以財施於僧

尼也とをもくはる

くはご　蠶をいふ桑兒は蚕を今をくはごをいふ八蚕中は一種也○倭訓は

結は女兒七夕はあるは色は糸を手首は結ふ紐も名を同しくすた

なばるはなるをもあるへし

くはだら　雷鳴は必をかくいふ八堂上は桑系八菅系なるをもをなり

菅神を火雷神とするをもは事とをもり張銑雷同を釋して譏雷之聲

同時而應是非相同不別善悪をもり

△くち　日本紀に櫛橛杙などとあり方言集に杭とあるハ本无枝也と注するに小さき倭名抄に杭と訓ハ槎牙も訓をへし○咋をくも日本紀古事紀に云ふくちと山城綴喜郡に咋近所萬葉集に馬咋山とよめるを○蜻蛉を訓るハ倭名抄に水ゆ牛馬に注する虫と注せり

くび　神代紀に頸とあり頭莖也とあるにかみくびと續世紀にうなじとあるにくびとも云ふ首も領も同し後世くびうち斬るに頭とも云ふ○人に弱きを注氏よりくびかそとよめり○軍中に辞にくび首ぬ

くびぜ　倭名抄に株又杭を訓り古事記にくびとあり本草にくびり

新撰字鏡に柮も櫪もあり○株をもるハ韓非子に見たり○株川に兎を得り

波古ゆきにあるくびせ川に兎をるやまつら篇

くびだ　倭名抄に蹤をあり獸を捕に械也と注せり杖路に杖加へし

くびす　踵をあり跟も同し俗よくびすともいふ倭名抄に見たり

新撰字鏡に踝をくびすとあり趾も同し

くびる　神代紀に新撰字鏡に縊とあり○絞刑も同訓也○古事紀に絞殺とあり或ハくびるとも云ふ○西土に帛を用ふるを従ひ引るを云ふ又絞殺とあるくびまるとも云ふ

くびろ　倭名抄に椽を訓せり古事紀にくびろとあるを奇とせり○書正義に男子之陰為勢與椽生其陰事亦同也とあるこれ

傳に宮淫刑也男子ハ割勢とあるを詳にせし也

くびたま　古事記大神宮式に頸玉とあり日本紀に瓔珞を訓せり

今音をもて記に御頭之璵とあるゆへ今猫犬の頸に懸るを

くびかみ　袍の縁領をいふ首上の義なり或ハ頸紙とも云ふ又くびかみとも

くくふ　新撰字鏡に咀又呾又噍とあり神代紀に齧とあり食ら

ふを略せる詞なり

△くべし　注に納とあるゆ焼をいふ紙をくべるとあるを日本紀に助加とあ

くへとよめり後拾遺集に紫折くぼくもみえてくるべる反ぶし
△くぼ　日本紀に踵をよめり霊異記に凹をよみ拾列東生郡撫凹村
とみゆ○埃嚢抄にくぼハ女陰の異名也といへり霊異記に閪をよみ新
撰字鏡に屎をよめり開也とみゆ又塊をよめり土凹也とみえたり
くぼし　洿字窪字をよめりくぼみたる所をいふともくぼむともいへり
いへり新撰字鏡に汚をくぼかにとよめり
くぼて　延喜式に葉椀をよめり窪手の義也槲葉を以て針して破子
のごとくに作れる物也といへり相撲節に神に供しけれハくぼてにとりたり又
式に窪坏といふもおなし瓦器にもなり木器にもなりて今盞皿を称する也
それも制ありしにやといへりくぼて物語の詞あり
神事にもちひしと也笠置にハ神に多かるくぼてにて見けむとぞ
笠置の神社ハ然前梅宮歌あり實方集なり
天の川笠置の神のくぼてにハ何をいれてかけるらん
くぼさ　日本紀に利字をよめり文選に羸をくぼさとよめるも同し文

選の注に羸ハ利也とみゆ
くぼふね　七夕によめり窪舟なるべし万葉集見安にハくぼ舟也といへり
一説に具穂舟と訓る具ハ其の誤同音に本集にも其世中と訓るへき其
地も具に誤れハ照し證とすへし或ハそれ舟也といへり
△くま　阿曲隈なとをよめり阿ハ発曲之隈ハ水曲之新撰字鏡に瑞
水隈も窠もよめり物にくまあるといふ也くまどりといふ事見え
くまどりハ西土にいふ暈子也くまを添と無事をとりかくるは詞に
や○兼好か月ハくまなきをのみ見るものかハとは東坡か春宵一刻直
千金花有清香月有陰の句によりてなつけるなるべし○前ハ日本紀によめりて倭
名抄に多し○熊をいふも全身黒きかる腹に月輪とて白毛あるをもて
月のくまより名とせるなるべし新六帖に
奥山に住むなる熊の月の輪にくまこそいとゝ添ふらめ
一説に日本紀に熊川をくまなりとよめるハ韓語なるへし今も其方言に遺れる
なへしともいへり今朝鮮人くまをこむといへり○蝦夷の熊ハ色黒く毛強し

してはなし膽もあり性劣れりとぞ○黄白なるを白熊とし黄赤
なるを黄熊とす其皮ハ珍奇とす○猶此名多くあり絲あるハ強大の義
なり西土に馬といふが如し○くま蜂くまはの義也○日本紀に奠をくまと
よめり漢語抄に神籬をくましねと見えたり今も神供にいふ詞也或ハ供米の字を用ゐ
より淨瑠璃記に今朝肉清米はくましね也古て浄米寂をいれて浄くま
ねあらて清いふくまねりと見えたり○熊野ハ深奥也兒嶋高徳の義を隠す云之

くまぢ　日本紀に隈をよめり曲路の義なるべし万葉集に路の久麻尾とよめり

くまみ　万葉集に隈回又阿回をよめり

くましね　倭名抄に糈米をよめり又以名に神稲をくましねとよむ今
姓に神代とあり新猿楽記に熊米に作りて又糈字をよめりまハ
奠の義なり

くまのい　熊膽をいふなり琥珀手餅膽藤膽などいふ油膽等の品あり
秋冬に浮くるを賞しとて穴熊の膽なり信濃熊膽ハ黒漆の如くな
らず涅色也とぞ○倭名抄新撰字鏡に人参をくまのいと訓せりとぞ

切の義なるべし比しくい字や陳藏器が本草に黄耆ハ藥中補益呼為羊
肉といふこともし

△くみ　倭名鈔に綬をくみ又用組字といへり雜綵を組の義也○新撰
字鏡に纂又條をよめり天治行合序に見えて机のわしゆひのくみ　類
聚雜要に卧組又唐組又ゆひくみ見えたり○今何のくみ、くみの
名なるもいへり班を譯を宋史に川班殿直ありといへり儀式帳に新羅組

くみど　神代紀に相與又奇御戸とあり古事記に隱戸に作れり古
閨門の義也一説にくみどハ隱處也くこ音通をとれり又みこ夫妻
隱り寢る所の古語なりといへり

くみかへ　袍のえりのはる事也といへり又辮髮をいふ也えびすの俗ハ亂れたる
時ハ髮をくるて居るも治まる時ハ髮をあげてそ世の志るしひろびく
時をくみ髮をとくといへり

△くむ　組をよむハ糸を繆留るの義也や、くみハとぢといふ也遍を組
とし圓を紃とす○一くみ二くみおぐみ引くむくみ合くみ撃などいふ

皆組れ物なり○與とも訓ずべし○水よりもいまだ分れざるを
おもふ時は海とも海も斟とも掘とも組れ物を重り組ハ
結ぶ物を組ハ組めも組とも組とも組り○弱みもいり拾集をつぐら
こうやくとうふ○あるいはもべくとうふ○芽ぐむ角ぐむ蘇ぐむな
といふも組れを如べし○酒をハ砂と云べし人をハ與と云べし膝をも
交と云べし塔をハ接と云べし○公務れ音をもいり
くもり　日本紀ニ澳區とみ新撰字鏡ニ澳を奥とあり埃嚢抄ニ
澳區をくまとよむと注ス八雲ハ奥ニ入れりくまといふ組べしといり
△くめ　貢馬れ貢し樫津ニ入るを出り○茅渟集ニ入るを出り○琉球ニ久米路れ行り尾くめ縄れ
とふ組り尾くめ縄れ○琉球ニ久米路れ行り續日紀ニ球美とい
ひ明人れ古米といふなり
くめべ　米目部ハ上古武人れ給し古事紀ニ大来米命黙利目と
いふなり○ふしハ目れ多如べし目をふしふ勇猛れ体を表す西土
ニ五代より級兵ハ其面を刺て民ニ示す○久米路の通を久

ひしまハ處胎經ニいふ五百紀人孤空而過見宮女之浴池失通力落
地といふを如べし
くめぢれ　久米路れ橋也久米れ岩橋ともいり役小角葛城山ニ
石橋を架せしれ一言主神を役使せしを小紀行りて元亨釈書
ハ載り一言主神れ雄略天皇を送りて久米川ニ入りたまふ事
日本紀ニ入るを小紀を造り出しかつ奇ともみ出るとれ
紀ニ役小角ハ賀茂氏なりしかつ可林良材ニ入るとり廢帝紀ニ一言
主神を高鴨神と称せしを彼此を合せてかく妄説を為ると如べし
○信濃水内郡ハ同名あり拾集
埋もれ中ハ中もといふなるまハとあちれ橋ハ四してゆけ
絶景れ奇巧也水内れ名も亦水ニ入るより水内れ曲橋といふも是
又武義入間郡ニ入るより義員ニ高時れ戦ひし所なり
△くもり　雲ハ隱るれ義なり雲ハ石ニ入るを雲根れ名なり○神
代紀ニ雲氣ハ雲ハ下掛れ義ニ○雲れまがき雲

此心ぼし雲のしがらみ雲のつゝき雲のみを雲のさ波雲のたな纏雲乃行しなどいふハ皆見えたる詞なり○慶雲を卿雲と通はしまる也西史にみえたり史記に若煙非煙若雲非雲郁々紛々蕭索輪囷是謂卿雲見喜氣也とあり○そびくとて雲のたなびく也といへり○伊勢物語にみゆ莊子にもやれ山に神人あり乘雲氣御飛龍とみゆ○おもふ人とをき山の雲になそらへよめる万葉集にも例多し新古今集慈部卿歌あり

よそにのみ見てやゝみなんかづらきやたかまの山のみねのしら雲

○雲鬢ハ雲の髮なり

和哥にも蜘蛛をよみなかくろふ雲のたちゐハ李芳が詩に行雲如妬月とみゆ○蜘蛛ハ喜母の轉なるべし陸機が詩疏に蠨蛸一名長脚荊州河内人謂之喜母とみえたり今の朝鮮語にもくもといへり和蘭にもさべむといへり○逃亡無籍の徒をさゝめも宿もなきものをくもといふも雲のさだめなきよりいへる成雲あ

なるも同じ一説に蜘の子の散るが如くいふ

くもゐ　靈異記に霒をくもみ常に曇をよめり雲を用ゐていふ也万葉集に八雲入ともかけり○新撰字鏡に壇をつくりてはりくもゐとよめり

くもゐ　日本紀に葦雲をよめり紀覚が傳に雲の集る也といへり孝經序に雲集而龍興とみえたりされバ雲居と書もよろし万葉集にも見えたり臣にて雲物とよむが如し○古事記にくもゐなたちくもも万葉集にくもゐたなびくとよめるハくもりをいふ也○禁闕をも比してよめり雲ゐの庭雲ゐの階雲ゐのよそなどもよめる也○讃岐阿野郡に雲居の御所あり崇德院御製

こゝもまたあらぬ雲ゐとなりにけり空行月のかげにまかせて

くもで　蜘手と書り伊勢物語に三河の国八橋の事をいひ水ゆく河のくもでなれバといへるハ水の蜘手のやうに流れわかれたれバ八橋などに堰河などはいへるをいせくかへとよむへしくもでぞ川おつるとて蜘手によめるによるへし　後撰集

打渡しせしハ八橋乃蜘手よりおもひよせし
橋なりといへり籠のめぐり柳乃上より橋かくるさまをいふを細ちがへたる形の蜘
乃手に似たるなり後撰集に
並立る松の木ずゑくもてにて霞渡れる天の橋立
○一説に八橋の蜘手とつゞけるハ蛛の手の数八つなるによりてなり
といへり○昔し八橋のかゝりし川ハ今の遇妻（トツマ）川也とぞ更級日記に
八橋ハ名のみして橋のかたもなしとみゆ○鎧にいふハ指物金の西土
にいふ十字架の形也燈檠といふも其形の似たるなり○鎗のさまにく
もでかくなるといふも蜘手結菓によりてなるなり○人の氏姓にい
ふハ口分田とよめり口分田ハ今にくばりし口をもて田を班てハ尊ハ大
臣卑ハ奴婢まであてし又田界あるも蜘手の様なり
くもとり　綾にいふハ雲鳥を交へ織なし也周邦彦が詞に雲雁
綾百詠注に雲鶴綾とみえたり
くもの絲　陶淵明が詩に夏雲多奇峯とみえたり文集に

みなたなかりぬとみえて大空にはやしき峯の雲のいろ那
くものゆめ　雲夢澤をいへり拾遺集
月清き須磨の夜しも請織の雲のゆめにて見る事も那
くもがくれ　雲隠乃義字の如くなるハ雲がくれにし秋の月の影
○道世又源氏の事にいへハ源氏の雲がくれの巻名と見え万葉集にも
さにあり石隠（イハカクレ）といふが如しそて今ハ為の奇名ハ禁忌の頌とするなり○
仕官ハ人の網羅にかゝり冠をかけて朝を辞せし人を隠者蜘蛛隠と称し
こと古き文にみえ田の凡そ隠ニ通隠仕隠朝隠市隠名隠如隠など云へり
くものはたて　雲の幡手と万葉集にみえたり日の入ぬる方に立昇る
やうにみゆるか旗の手に似たるとよめり字之八幡に取てよめり詩にも雲旗
と見えたり其の雲の形をさして云ふが如し一説にまでて八万葉集に尽くの字
をよめるはまてその謂之祝詞に青雲の靄（タナビク）極（キハミ）といふが如し極を万
葉集にまでとよめるはまでも同じ　雲涯といふの辞也
くものはやし　雲の林也殿上人をいふとみえたり○八雲に雲林院也とみえたる

白愛宮郡まそらぐ　ぬとふ布を
くもたらこと　雲立渡と云り仙洞親王拾遺抄の文よりの字法
ぬよ始るといふ立渡雲とも云ゆ○龍膽立渡ひり拾遺抄に見ゆ
菊立渡ひり○類聚雑要に建渡雲透振物と見ゆ
くもたちるまひ　古今集序に奇なる歌の拳動也と日本紀に奇
よいくもたちおこるひさかたのくもの形せるくもとみるよ八隅抄
詩疏に喜母此出来着人衣當有親客至有喜也幽列人謂之親客亦
如蜘蛛為羅網居之是也とかくり○雲に立舞をくりる歌を仏
長百韻くり

風をくもの雲をまひとなりてかくてまくるを名とそ
くもたちうへひと　雲上人也殿上に侍る人をも稱
せり雲客八六朝文にかくり史記に喜君能致於青雲上○琉球
り親雲上とぞいきんと称を官名とす
△くやむ　悔をいふやむ反ゆ

くやす　萬葉集に潰をくやすと反ゆ日本紀に潰をくやすと
に崩をくやすり万葉集にいそぐくもあり今も崩を用ふ
△くゆ　日本紀に悔過をくゆと訓とあるべし
ありきれ八音をくゆと訓とあるべしくゆと八同語○日本紀に
折衝をまりくゆとあるもくゆ八けるに
くゆ　拾遺集に河原院いとゆ悔をいふくゆ八潰を第り
くゆ　燒　拾遺抄に故遺失なとにふもぞる米をとり又源氏に
くゆ八ゆ花とるゆくくくゆ薫をくゆ八同韻
△くく
△くら　座をくらあり来品に
いくら国八海るぐら也○鞍も座に
千鞍張鞍名に名とり第に記に鈴唐鞍といふ物も見くり○彩撓
字鏡に撓をくらくらあり優字に
くらおく　撓鞍肉くらおくごろとくり○伊勢鞍八伊勢伊勢守平

貞継より継といふ貞継ハ大坪道禅より継ふといふ○かひくらハ螺鞍也○
ひとくらおくといふ俗語ハ座の義なるにや○廨ともあり
くらゐ　位をよめり續日本紀に座坐と書せり位に四分あり一位より
三位まてハ正従あり四位より下ハ皆上下ある也○韻會挙要に凡所當
立者皆曰位又立位同字古云春秋公即位為即立とみえ○神位を進め
たまふ給冠をまゐらせたまふなといへり冠位の称あること也○位山ハ朝廷を
といへり飛騨の山の名也字も呼て帖まハ位階なる位の山とよめり安曇郡の
弾と堺ひをなして殺あり
くらし　暗昏をいふ黒しと義通す○和泉式部かくらきよりくらき道に
ゆり入ぬへきとよめるハ法花経の文也源氏にもあきらむるすといへるも
晦跡の義行かくるゝをいふなり
くらふ　食をよめりくらふ反する牽(クル)の義也咄さきハ入声也喰も同し称
代紀に噉もよみ霊異記に餡をよみ新撰字鏡に喫をよめり○くらハ
さむハ今の食也飼と通せり○くらハすハ縛よりいふ酒人を打すと

いふを西土にも喫を棒と見てありされと此喫ハかうふると訓せり○薩州
乃鄙語に人を打をくらふんかといふ我をちんといひ己をおらといふなとといへり
くらげ　舊事紀に水母をよめり古語に水母浮なりしといふハ暗き義なり
といへり文選に水母目蝦(ニス)ともいへり春夏を問風波に随ひて蟹と
いふ物にこれんて水母に附て来るといへり○俗にくらげも骨まわすといふを
天経に穏なる事に行ふ事をいへり本草集り
家言に海月をより待ててくらげも骨まわりて世にありやと
崔氏食経に海抒一名水母となりて其なよふ不知るし聞書なとにみえるハ
海月ハ海蛤類也とといひし即海鏡也○七五三五五三なとの名ありけ此ちるを
第一とするハ𠮷邦にて天地の始をとへて魚の名の事なりて姫なる儀
なり○水くらげハ水地也食へかす筋なりをなくらげといふ皆無なり
丹後宮津浦のくらげハ紋なりといへり食用とするハ唐くらげなり柳くらげ
げといふ肥前に唐くらげとて食へハ赤し肉厚し
くらもち　姓に車持あり古事本かくよめりまたくらし

こらんぶと　蔵人とゝめりこれ猶之俗よりうづとも云り蔵人記五位蔵人六位蔵人なとゝいふり○六位の蔵人極臈の殿上の麝塵の袍を拜領し高用す極臈の殿上の袍を新蔵人とゝ女蔵人ゝゝ云男蔵人とゝ寛平小式に見ゆ○蔵人所の下部を小舎人とゝ海人藻芥に云へりぬへき大臣家の蔵人所もありるゝ源氏の紅梅亭に有けりとゝ

こらぎり　日本紀に座下まゝ風とゝめり座豈とゝらがとゝめるに対す

こらふる　競をゝめりけぐとゝ

競馬をゝめり今は音をそゝり文昌雑録に軍中以端午走馬謂躍柳とゝ大周に行はゝ類聚雑要に保延三年仁和寺殿競馬行幸ゝ見ゆ今賀茂に行ふを騎射の赤黒の折毬樂狛鉾の蘇朱を用ゝ

こゝゝとかつす　源氏に見ゆ官職の事を女ゆゝりゝゝゝと云

ゝゝりと抄物にゝゝゝり致仕は官を辞して位を辞せず罪ありて官位を停めらるゝは別の事ゝ女文なゝす言事記續紀なゝふも大臣の位ゝゝゝて官を位といふゝゝゝゝ古語なり

△こゝゝ　應神帝の御代に百濟より王仁ゝゝゝゝ書を奉る今は細石とゝり石ゝゝゝ方言なるゝ書を奉ゝゝ今は細石とゝり石ゝゝゝ

こゝ　○涅をゝゝゝゝ黑土也と注せり俗ゝゝ涅鉄とゝり○新撰字鏡に黯黑也とゝ注せり○栗子を名ゝゝゝ黑ゝゝゝゝゝゝゝ又ゝゝゝ稜角をゝゝて三稜草をみゝゝと訓を石をゝゝ日向風土記に俗謂栗為區児とゝゝゝ

○延喜式に搗栗子扁栗子煠栗子削栗子ゝゝ目ゝゝ扁栗子ゝ今は打栗なゝ類聚雑要に搗栗ゝ○九月九日に栗とゝ事ゝ熙朝樂事に栗扶くゝ栗刺ゝゝゝゝ優名抄に栗刺ゝ扶ゝ本草に莪に毛毬とゝゝゝ俗に杓子と称ゝゝ栗楔也とゝ○栗虫ゝ形九ゝゝ白ゝゝ出見は見ゝゝ

と喩へいへり又似栗虫といふは人参につけり○厨をよむはくりやの略なり
寺院の香積を称するは庫裡の唐音也といへり書言故事に稱斎厨
曰香積之厨とみえたり

くりや　和名鈔に厨をよみ庵屋也と見え黒屋の義なるべし新撰字鏡
に厨をまれくりやしとよめるは魚之○日本紀に厨をよめり炊烹の人を
いふなり仲文家集にもくりやかねあたくをみてと詠り○くりや
の浦は紀列にあり厨川は奥列にあり栗屋の城は紀前也

くりぞめ　日本紀に皂をよめり涅染の義也○くりかへしも同義也

くりごと　諄字の意繰言の義也字書に諄は誨言重複也と見えたり

△くれ　暮をいふ古今集にくれとのみよめり是也○日本紀に辜
をよめり事の暮るるといふ意同し書籍にくるといふ絹法被等にも略下
襲の字をくるといひ兇のかぶり紙くるといふも皆其義なるべし○倭名
抄に縿をよめり綿系なるにいふ是之又趏をよめり○剜をいふえぐる
さぐるなどいふ是也○蝦夷にくるといふは部衆の義也といへり

くれい　暮をいふ万葉集抄に日の暮は暗くなる故くれといへり湖によくすなと
いふ此義也○日本紀に養字をよめり食に飽て心満ち足りて人の
如くなりとみえたり神代紀に奇詠投亭を日本紀と読ませある同し
くれといふ絹志佐日紀にも布絹にも見ゆ○くれは転関也戸あくといふは樞
也牽の義なるべし今くれとも云り万葉集にくるる釘さしと見えたり
源氏にはくるとたと見ゆ落窪に同し

くるふ　日本紀に狂をよめり旋轉のまはり方にくるふ也今くるまと
云りあし反さし反皆也○霊異記に詑狂とよめり

くるし　苦をよめり縿より出たる絹也や又窘の轉音かや訓をくる
とよむなるし

くるま　倭名抄に鞦をよめり射鳥矢の名也と見えたり鴨に用る縮
字の意は凌へし縮にくるりと云をなしといへりくるを繙りていふも同し○上総
の郷下の名にもくるり

くるま　車を訓せり轉輪の義也ととへ起せり鴨毛車江次第にみゆ

むかし傳ては凡車ハ唐廂（カラヒサシ）桟榔毛ホハ皆桟榔ニ云ふく尾眉半部紗代
ホハ皆ひのぐるまふり○海人藻芥ニ唐車飾車糸毛車賀茂祭ノ日
典侍乗之渡二條大路也唐庇車仙院或親王或執柄被召之檳榔
毛車已下公卿乗之とあるとも車ハ五位ハ白ク五位ハ赤ク但六位以下
もを人ようてはるるひとり法曹至要抄ニハ○宋元豊中ニ我國
ハ車を高麗ヨリ献セリ車文品雑録ニハ又新法ハ車をるるり
駕セリ車左ヘうまくすとハ群碎録ニ三代西漢用馬車魏晉至陳
梁用牛車とあ後ヘう苫車ハ後漢図ー○大八ハ車輪ニ大八葉
小八葉とハ車ハるうり名となるも也天工開物ニ獨推車夢華録ニ浪
子車とあるり○車坂ハ今熊野ヨリ稲荷ニ詣るに路とと還坂と
ハ○伊勢奄藝郡久留真神社式ニハ吳津女ハ采をつ及ふ
是雄略紀ニハ伊勢衣縫ハ祖なる弟姫を祀るなるへー浜路ホ和
伊勢久留真神社ハ伊勢ヨリ紀ヨリ也今自子里ハ南を栗間ニハ
又栗真御庄ハ朝野群載ニ高野ハ今ハ寺家礒山別保ハ是栗真庄也ヨリ

ハるべき　倭名抄蚕糸具ニ反轉ニあり糸をうるとハ名ヨリ
今と糸ふるはるるハ反ヨリ而ヨるるてかせるとも也ひとるもいふと桜茶紙ニ
るるへき物とハ○安藝ホハ訓覓とあるも字音を用ひるとも
ホハ反物を同しかるへー○うるわ絶ニ車ハ編ハてくるべかりて
と用ひもハり
るるつ　日本紀ニ明日とあり来るつ日とハつ助辭なり
るるまざき　左傳ニ轘とあり史記ニ車裂とあり
るるつとー　日本紀ニ此年とあり来るつ年とハ
るるめうせり　新撰字鏡ニ祕とハ労也とハるる据るるや
るるまをかしか　薛廣德ニ故車也七十ハ齢とハふとハり乗絶
今とふひし車を引つまそなるとも老らくもるるるや
るるまをかしか　万葉集ニハみゆ西庄ハ車ニ七月ニ百ハ百と波車両と
いふるるるるる
△られ　日暮ニハふるるる同し○東ハ紙ニ本ニ元ハ紙ニハ

○にれはされおといふハ是也義如へし○呉をよめるハかの国よりまゐるよ
る蕃国の久礼波久礼志の二人をしるべとせし事應神紀にみえたりよ
てかくいへるなり呉人を置し處を呉原といふ古事記日本紀にみゆ大和
高市郡也古名なり
暮をかきて暮ハ春なる躬日出にくれを以此ゆへ名付たるて
○材木をいふ木斷のつゞまりたるにや儀式帳に材をよめり三代實録
に榲榑延喜式に檜榑清和紀に榑階新猿楽記に安藝榑なと
見えたり又櫄に作るハ倭名抄に壁柱也と注せり字異にして意也
と後拾遺集に暮をかけたる哥
濃き染をこき紙土のつまくみ染とこそ見えしけれはやかりける
○紹りくれつくづまりさるなといふも榑より出たる辭如へし○西
りけ舟にくれ舟とよめるも榑木を積たる舟なり○應神紀に押
榑龔木なと見えたり屋の具也○兼名苑に紹もしを相て屋を葺
と見えを切なといひ扖字造囲らあづまなる墟坐の屋なといひし制にや

ともりつちくれの略なるへし
くれよ　紳代紀に奉字又可以接の字をよめり本字の皇代紀に
養光をくれとよめり東雅り橋本譯まて趣女群参の時紛乱
に橋本乃君は紛の際をくれ卒家附して松川乃くれて色くや○深栖
り一入二入なとゝいへり深紅によく紫の紅をくれてくれたり○かりしそ
くれなゐ紅縁ハ染たる紅の分與乞與説與なといふ與のことゝいへり
くれなゐ　萬葉集に呉藍とかけり紅花で紅色をいふ倭名抄にくれのあゐとゆ
くれなゐのあゐなる紅花ハいにしへ呉国より来るものなれハ今ハ国そのまゝを称せり
又西土に呉藍といふもの此ハ藍の類也○爾雅語報に蒨纁絳朱ハ此紅之
深数也一入為蒨再入為纁三入為絳四入為朱ともゆ
くれなゐ　倭名抄に笛てゝみ淫語抄に呉竹と書り昔し呉国より来
るものなりとて今ハ禁省にも葉細く大なる竹をハくれたけといへり呉竹
臺に深青によりてくれ竹の名をもつて宿せしめ朝政の所
ろくれたけ朝政の設也といへり○御名の枝詞といひなるへきも竹節

此郷語なるべし

くれ　綾匠　くれを西土此文字多くとなりあり　或ハ誤くを譯せ
て方言集録

幸ちはやぶる　日本紀に呉織をみ古事記に呉服とあり　○寺社屬
辞典にくれハとりあやといふハ呉織穴織とかそれなるハいやしきなり　源氏
物語又呉服綾　延喜式後撰集に見えたり　○くれハとりハ伊勢
物語歌に見えたり　元方此奇なりとかいひ　○くれハとりハ風土記に久礼
波之登利須　杵川さんくとり

くまそかり　姓氏録商長首此ものに呉國雜寶物為交易其名云波
賀理其中有呉桙とかくまそかり

くまそかり　熊を狩くめり　熊ハ熊をかるる

くまのゐ　此　熊野　又用元遺事に楊き妃の故事あり
古今集

くまとりしあらくもに年月をかけてかくれりけるひとり　○くまのゐ
△くろ　畔　くろめり　轉　くろまろ　くろくろ　くろくろ　くろくろ　くろくろ　くろくろ　くろくろ
り　壠　くろみ塚也　くろくろ　○くろ　黒色なる物に多く積累称くろ
ふるくろ　藁くろ　栗くろ　稗くろ　くろくろ　くろくろ　くろくろ　くろくろ
くろくろ　黒をくろ　昏くろ　おくろ　○くろ　くろ　くろ　くろ　くろ　くろ
黯　字此をくろ　媒此をくろ　くろ　くろ　くろ　くろ　くろ　くろ　くろ
くろび　萬寶不求人に空漏日とあり　田家宝に鍋釜底に日を
とくろ　くろと暦に黒圏とあり　此を黒日とも
受死日也　○暦に十とあるも十死日也　俱に大凶日也
くろかな　詩經に鬢髮也　くろ　くろ　くろ　影撰字鏡に鬢とかみくろ
くろ　○黒髮　くろ　上古也　日記に逝　又海中に
くろくろ　日本紀に　くろ　くろ　くろ　優名抄に鳩　万葉集に
日記に　馬　くろ　くろ　沿革此氏に

乃好音を聽きて逃落うしなふ盛衰記に小
兒をとらんとて面体を小文に略あつまりて動き出ハ雷となるとあり
ありと引地せり東海に海黑多又海鳴とあるとあり符堅の敗
まて附に聞風聲鶴唳皆以為晉軍之至とあり李愬の吳元濟を襲
附に鵝鴨他を擊て軍聲を紛るとあり同日此海也又秋鷄は小形
なるもとあり

こんぐ　麥奴とあハ黑穗のまくもじなるもあ各臣言行錄に
烏昧草も見えたり○貝に云ハ讃列賀列あり烏授也とあり
○蛮人にあハかりあれ産郎崑崙奴也朱或に可談に廣中富人
多畜鬼奴云々有一種近海者入水服不脛謂之崑崙奴とあり
又因引鹿野に長七尺ハ男ハり高麗陣に附因ハ又多崑崙奴ハ
産色黑て黑しとあり又晉書に李大后形長而色黑宮人皆謂之崑
崙とも黑物糖と崑崙蔗とも云あり和蘭人こんぐと呼ハ今
長崎にあるは水練に熟ハり此人黑人なるとそ元黑人も呼

てこんぐとあ唐扶南傳に崑崙勃姓ハりとあり又黑崑崙とも尺
ハり○杜詩に家々養烏鬼とあるも鸕鷀也とあり崑崙奴とあ
ハ明史に据也ハ良に然り一夕話に我ハ乃邏邏國に猶も
ハりとあり　黑酒白酒とあり酒ハ名にて大嘗會に辞と
萬葉集天平勝寶四年新嘗會ハ奇にあり康富記に醴酒と白
者自其色也黑者上聊振烏麻粉とあり今ハ白者ハ法酒と用ハ
ら烏黑ハ貞觀儀に燒灰とあり延喜式に灰三斛と
ハりて中ハ黑胡麻なるし○酒弥豆男神ハ黑御酒造神也
酒弥豆女神ハ白御酒造神也とて酒殿神社とあ
ハりとあるみと　黑戸ハ御戸也黑戸ハ御薪とあるハ清涼殿ハ小ハ
ハり又清涼殿ハ小ハ殿ハ小ハ殿なるし　拾芥抄に見えたり○
樓裡女中須ハ佛壇と御黑戸とあ
ハりざあるぞ　黑本赤本と分ハ

[illegible]

△くるま　窠字と同事なり続日本紀に窠子錦又綾ともいり本朝式に小窠錦一窠二窠五窠錦等といふ韻府に古有逃死者寄魂於蜂窠中鬼尋不見といふ[illegible]据と又鳳乃すなわち或は木瓜と截る象と写しなる也といふ窠の紋窠に霰等といふ○屯営に中十人一房に炊爨を共にするとき十人を火長といふ其頭領を火長といふ火と夥と音を通し夥長ともいふ又海船に長を夥長といふ又火伴といふも同し○ちよいふは靴と見ゆ

過所に音也続日本紀関市令方策集あり[illegible]軽者の過所至関律以示也或云傳過也移所在識以為信といふ今いふ[illegible]也[illegible]過書といふ朝野群載に過所牒見ゆ○過所舟ともいふ[illegible]関市令に若船筏経関過者亦請過所といふ[illegible]小[illegible]と傳道といふ[illegible]一也[illegible]○宋白曰古書之帛為繻刻木為契二物通謂過所也○甚所を過ぬ宮の處分なる所に過ぬとよめ

くるんらく　縉紳家にて病氣に事を歓樂といふ友語なるべし[illegible]

[illegible]拜賀元服婚姻等に祝儀に附所勞ひとり[illegible]に辞を歓集に子細ありて参賀せぬとなどいへり[illegible]

くるうじん　本は毗那夜伽に譯称障碍神にて如来荒神鹿乱荒神怨怒荒神に二身を三寶荒神ともいふを[illegible]は元障礙経に見ゆ[illegible]竈神と荒神と称し[illegible]乃二神に大土祖神と配し[illegible]又興津彦興津姫たぐ荒ぶ神と古事記に荒神といふ[illegible]と一体三面に神魂と況したまふ[illegible]附會に[illegible]寺に荒神和刑笠に荒神なとは[illegible]氏庶得の神也[illegible]中世に盲人琵琶を鼓し地神経を誦して[illegible]紀一巻に卑俗に文字なくして藏書に目なし紀不也[illegible]

空衰記ニ荒神鎮て財寶を得とゝ又陀天ハ法ともゝり即陀吉尾天
乃邪法ハ神或ハ貴狐天王とも称ゝり又知足院陀祇尾ハ法と行ふ狐
ハ尾ゝ多くゝ福天神ゝて其祠ゝり〳〵ゝ著聞集ニ見ゝり
摂州の西一条大路の南ゝゝる是なり

△くゝね　貴音と掬音ゝくゝねゝゝみ事ゝり今ハ唐音ゝもゝゝあり

△くゝゑ　日本紀ニ蹙字蹶字ゝゝゝゝ及ひ也○延喜式ニ久惠
膳ゝり魚ハ名也

△くゝ